

魅力ある英語教科書づくりのために

— ノルウェーの教科書からの示唆 —

島田洋子

昨年度の中学用教科書検定に続き、来春から使用される高校教科書の2005年度検定結果が、新聞紙上で一斉に公表された。4年ごとに刷新される各社の新しい教科書を読み比べてみるたびに、細部での工夫は認められるものの、どの出版社を取ってみてもあまりに似通った作りで、十代の若者にアピールする迫力や魅力が感じられない。教科書が個性を発揮できない理由を、山田(2004, p.201)は「検定制度のもとで、教科書の編集方針や内容を事細かに制限している。これでは大きな逸脱こそ避けられるかもしれないが、教科書の健全な発展や自由な発想、自由な競い合いが大きく制限されてしまう」と指摘している。筆者も検定制度のマイナス面には同じ危惧を抱いている。

ただ、本稿では、制度の問題や言語習得に関わる問題ははずして、内容面に絞った検討を行うこととする。英語教育の要である教科書を、生徒たちに英語を深く学ばせる動機付けとなる魅力的な教材にするカギはどこにあるのだろうか。本稿は、その手がかりを日本と全く異なる考え方で作られているノルウェーの中学教科書⁽¹⁾に求め、教材の特徴を考察する中で、日本の中学・高校の教科書づくりへの提言を行うものである。

I. 題材の選定

1. タブーを排除する

田中正道は「教科書の題材が平板で、刺激とパンチ力に欠ける」(英語教育1992年6月号, p.12)一因は「タブー・リスト」にあると言う。

① タバコ，アルコール，ドラッグ等に関する話題

② 性に関わる話題

③ 政治，宗教，人種，ジェンダー等についての急進的な考え方

等を教科書で取り上げることは，日本では，検定に通らなかったり，採択されないかもしれないということでタブー視されている。実際に高校教科書の執筆において，筆者はタバコを手に持っている人物が背景に写っていたために，写真を取り替えさせられた経験をしている。高校英語教科書 *FIRST ENGLISH SERIES II* (見本本) の 1 レッスン 〈War〉 が差し替え⁽²⁾ になった事件も思い出される。しかし，「これらのトピックスこそ，社会性が身につき始めたティーン・エイジャーが最も興味・関心を示す話題である」(同上) と言える。比較のためにノルウェーの教科書を開いてみよう。

小学校 1 年生から週 1 回の英語の授業が必修化されているノルウェーの中学教科書は，レベル的には日本の高校の教科書に匹敵するものである。従って，2 カ国の中学教科書を比較した場合，難易度や言語材料の扱いが違っているのは自然である。しかし，13～15歳の若者の知的レベルや関心事は変わらないはずである。また，ノルウェーでは2000年に検定制度が廃止されたが，今回取り上げた *FLIGHT 8～10* は検定廃止前の98～99年発行の教科書である。日本では確実に排除されそうな典型的な例をいくつか紹介しよう。

FLIGHT の 1 年生の教科書は 8 つの chapter に分かれている。その内の 1 つのタイトルはそのものズバリ 〈Crime〉 である。最初の頁には，暴力におびえる青年，手錠をかけられた手のアップ，財布をすろうとしている手のアップ，仲間をいじめている少女等の写真が見開きで載せられている。その後には 3 本の新聞記事のリード (Pickpocket on High Street / Hooligans ruin football match / Young shoplifters caught) と切り裂きジャックの物語が続くという構成である (*FLIGHT 8* Chapter 7)。

主に米国について学ぶ 2 年生の教科書に出てくる世界各国から米国に移民してきた若者の自己紹介は以下のようなものである。

Sheila: My ancestors came over from Ireland in 1848 because they were starving back home. (私の祖先は1848年にアイルランドからやってきました。故郷では飢えていたからです)

John: My great-grandfather came to the USA with his Swedish parents They were poor and hoped for a better life in America. (僕の曾祖父はスウェーデン人の両親と共にやってきました。両親は貧乏でアメリカでのよりよい生活を望んでいたからです)

Juan: I'm Mexican. . . . I don't think I'll ever go back to Mexico, because there is no work for me there. (私はメキシコ人です。でもメキシコに帰ろうとは思いません。故郷では仕事がないからです)

Leroy: I'm African American. My ancestors didn't really come to the USA because they wanted to . . . they were brought here as slaves many generations ago. I wouldn't want to go to Africa to live, though. (僕はアフリカ系アメリカ人です。祖先は望んでアメリカにきたわけではなかったのです。何世代も前に奴隷として連れてこられたのです。でも、僕はアフリカに帰って住みたいとは思いません)

(FLIGHT 9 Chapter 4)

また、黒人差別の問題を扱った chapter は、次のような吹き出しのついた9人の老若男女の写真で始まる。

“There will always be fighting. It's human nature!” (戦いはなくなるだろう。それが人間の本性だから)

“Different races can never live in peace!” (異なる民族は決して平和に共存できない)

“Only men start wars!” (男だけが戦争を引き起こす)

“Fighting would stop if the leaders were sent to war!” (指導者たちが戦場に送られたら、戦いは終わるだろう)

続いて日本の教科書にもよく取り上げられているロザ・パークスのバス・ボイコット運動のテキストが出てくるのだが、その最初の頁には、当時の

南部社会の説明と共に、KU KLUX KLAN の写真が大きく載せられている(Chapter 7)。

英国やオーストラリア等米国以外の英語圏の国々を主に扱った3年生の教科書では、まず、ドラッグを正面から取り上げたレッスンに驚かされる。友人宅のパーティで偶然経験したLSDによる幻覚からドラッグ中毒になり、何度も抜けだそうと試みたがかなわず、最後には薬の飲み過ぎで亡くなった一人の少女の手記〈Go ask Alice〉である。レッスン中には、ドラッグパーティ(?), たばこを手を持つ男性と女性、たばこを吸う女性の顔のアップの写真が挿入されている(*FLIGHT 10* Chapter 3)。写真とと言えば、抱き合っている男女の若者、おへそを出した若い女性2人、ディスコで踊る若者たち、パンクルックの若者、全身に刺青を入れた男性の写真等が散見される。

また、ダイエットをテーマにした記事も出てくる。やせるためにダイエット中の少女が、家族との食卓で両親と衝突する手記〈Dinner at the Hiller's〉の一節を抜き書きしよう。

“Well, I can't be happy unless I'm thin.” Strike. I sat down on my bed... “Leslie,” Mom said, trying to sound calm, “when is this dieting going to stop?” That's easy, I thought. “See this?” I said, grabbing the flesh beneath my rib cage. “See it? When that's gone... that's when I'll stop.” She stood there silently for a moment, then turned and left, closing my door behind her. (「スマートでなければ幸せじゃないわ。」ぶたれた。ベッドに腰を下ろした。「レスリー、いつになったらこんなダイエットをやめるつもり？」と母は努めて平静な声で言った。それは簡単なこと、と私は心の中で思った。おなかの肉をつまみながら私は言った。「これが見える？これが無くなったらやめるわ。」母はしばらく黙ってそこに立っていたが、それからドアを閉めて出ていった。)

(Chapter 6)

ここに取り上げたような題材には「タブー・リスト」は存在しない。確

かに日本とノルウェーでは、制度、政策の違いや人々の価値観、意識の違いは大きいと思われる。ノルウェーは、男女平等において世界の最先端をゆく国であり、離婚率、非嫡出子の率共に5割近くに達する国でもある。同じ検定教科書とはいっても、教科書に求められるものも違ってくるのは当然である。それにもかかわらず、これらノルウェーの教科書の題材は、日本の若者にとっても最も関心の深いものであり、その一見過激に見える内容の扱い方は、彼らに社会の問題を深く考えさせ、英語を進んで読みたいと思わせるものであることは間違いない。

2. 本音で語る

新学期最初の授業で接するレッスンは、その後の生徒たちの学習の動機付けに大きな影響力を持っている。読み比べてみると、学校生活や友人関係のトピックスが多く取り上げられるのは、各国の教科書に共通する特徴であることがはっきりするが、その扱い方には大きな違いが見られる。「楽しい学校生活が始まります」、「いろいろな国の人々と友達になりましょう」と当たり障りなく始まる日本の教科書の英文に、十代の若者が共感する要素は乏しい。一方、生徒たちの目線に立って彼らの気持ちが本音で語られている教材に接すれば、生徒はそこで使われている表現を早く習得したいと思うようになるであろう。学年ごとにノルウェーの教科書の最初の頁を読んでみれば、この点でも日本の教科書との違いは歴然としている。

FLIGHTの1年生の最初のchapterもテーマは学校生活である。次のような詩からレッスンは始まっている。

I don't want to go to school today

I don't want to go to school today, 今日には学校に行きたくない,
'Cos I hate it, 学校が嫌いだから,
.....

I think I will go to school today, 今日には学校に行こうと思う,
.....

'Cos she sits in the row in front, 彼女が前列に座っているから,
'Cos she smiled at me. 私を見てほほえんだから。

隣の頁には、個性的な6人の生徒のイラストに“I must be the shortest person in this class!”(僕がこのクラスで一番ちびだ)“I am nervous!”(私不安なの)“I don't want to go to school. I want to play with my computer.”(学校に行きたくない。コンピュータで遊びたいんだ)等のモノローグが吹き出しでついている。その後が続く最初の読み物のタイトルは、〈My first day at a new school〉。生徒の話かと思えばそうではなくて、新学期に感じる新任の女性教師の不安な気持ちが描かれている。窓際に一人で立っていた新入生の男子生徒とほほえみ交わり、教室で彼を発見して、My new young friend という先生の言葉でパッセージはしめくくられている。このchapterの最後ではイギリスの中学生活の様子を描いたレッスンを読むのだが、A pupil in Britain is just like you: Sometimes you like your school and sometimes you don't like school! (イギリスの生徒もあなた達と同じ。学校が好きなき時もあれば、嫌いなときもあります)と、生徒の気持ちに沿った英文で導入がなされている。新入生に学校や教師への親近感を抱かせることで、言語習得の障害となる affective filter (情意フィルター)を低くしようとする意図がくみ取れる。

2年生の最初のレッスンは〈When school's out〉のタイトルの下、次のイントロで始まる。

Welcome back to a new term at school! Now that you are here, think of it this way: if it hadn't been for school, you wouldn't have had those lovely afternoons, weekends and holidays to look forward to! (新学期、お帰りなさい。学校に戻ってきたのだから、学校が始まることを、こんな風に考えてみましょう: もし学校がなかったら、素敵な午後も、週末も楽しみに待つ祭日もなかったのだと)

3年生のChapter 1は友達について考えるレッスンである。〈What is friendship all about?〉のタイトルで、友人だと思っていた2人のクラス

メートから心が離れていく様子を記した少女の日記が載せられている。9月8日の新学期に始まった日記は以下のような記述で終わっている。

16 September

Dear Diary,

I'm so embarrassed. How could I ever think Sally and Debbie were my friends?...

I'm seriously considering running away to Greenland or something... I'm not sure I want to be friends with anyone any more!

Felicia

(9月16日、親愛なる日記帳へ、私、とても戸惑っているの。どうしてサリーとデビーが友達だなんて考えられる？グリーンランドかどこかへ逃げていこうと本気で思っているのよ。もう誰とも友達になりたいなんて思えないわ。フェリシア)

友人や家族について本音で語られた次のような詩も、生徒の心に強く訴えるだろう。

I don't want to play in your yard

I don't want to play in your yard,	あなたの家の庭では遊びたくない、
I don't like you any more.	もうあなたが嫌いになったから。
You'll be sorry when you see me	あなたは私が2人の地下室のドアを
Sliding down our cellar door.	閉めているのを見て後悔するでしょ
.....	う。

I don't want to play in your yard,	あなたの家の庭では遊びたくない、
If you won't be good to me.	あなたが私に優しくしないのなら。

(FLIGHT 8)

Oh, Brother!

My brother's a motorbike freak.	僕の兄はバイク狂。
---------------------------------	-----------

Each week	毎週
He rides races	レースに参加
In the oddest places.	とてもへんびな場所で。
He climbs hills,	丘を登り、
Has spills.	バイクから振り落とされる。
He speeds	スピードを上げたり
And cruises.	ゆっくり走ったり。
He gets action,	芸をして、
Satisfaction,	満足してる、
But mostly,	でもたいてい、しているのは
He gets bruises.	怪我。
<i>(FLIGHT 9)</i>	

My brother Bob

My brother Bob	兄貴のボブは
He's got no job,	失業中、
He just hangs about	ただ町をぶらつくだけ
With his life hanging out.	のらりくらの生活だから。
<i>(FLIGHT 10)</i>	

最近の日本の教科書では詩は敬遠され、生徒に人気のある歌が主に巻末付録として2, 3編のみ紹介されているのが普通である。一方、詩が数多く掲載されている(平均1冊の教科書に15編以上)のも、ノルウェーの教科書の大きな魅力になっている。アメリカを扱った以下の3編の詩も、生徒に深く考えさせる内容を持っている。

America

Life can be bright in America —	アメリカでは人生は輝かしいものになる—
---------------------------------	---------------------

If you can fight in America. もしあなたがアメリカで戦えるなら。
Life is all right in America — アメリカでは人生は申し分ない—
If you're white in America. もしあなたが白人なら。
(FLIGHT 9)

But you didn't

Remember the time you lent me your car and I dented it?
あなたが車を貸してくれて私がべち
ゃんこにってしまったときのことを
覚えてる？
I thought you'd kill me... 殺されるかと思った…
But you didn't. けれどあなたは殺しはしなかった。
.....

There were plenty of things you did to put up with me,
我慢してくれたこといっぱいあった,
To keep me happy, to love me, and there are
私を幸せにし、愛してくれたこと,
So many things I wanted to tell 話したいことがたくさんあった
You when you returned from あなたが戻ってきたときに
Vietnam... ベトナムから…
But you didn't. でもあなたは戻ってこなかった。
(FLIGHT 9)

Pollution

If you visit an American city, アメリカの都市を訪ねたら、
You will find it very pretty. とても美しいことが分かります。
Just two things of which you must beware:
そこでは2つのことにだけ気をつけ

なければなりません：

Don't drink the water and don't breathe the air

水を飲まないことと空気を吸わない
ことです。

Pollution, pollution, they got smog and sewage and mud,

公害, 公害, スモッグと汚水と泥に
まみれ,

Turn on your tap and get hot and cold running crud.

蛇口をひねると, ねばねばした温水
と冷水が流れ出します。

(*FLIGHT 10*)

ここには、学校や友達、家族等身近な存在に対して誰もが感じる気持ちが素直に表現されている。英語の教科書では定番のアメリカを扱っても、人種差別、ベトナム戦争、公害とアメリカ社会の抱える負の部分から目を逸らさず、現実をありのままに描いて、生徒たちに討論できる素材を提供している。建前ではなく、本音で若者に訴えようとする教科書の編集姿勢がはっきりと打ち出されているのが実感できる。

山田(2004, p.165)によると、日本の中学校の教科書では、「全体の 65% (一年生用では 90%) に対話形式が採用されている」。日常会話中心に編まれた日本の教科書には、上記のノルウェーの教科書のような内容のある読み物や詩がきわめて少ない。根本的な見直しを期待したいと思う。

II. 語彙の選択

1. 語彙サイズ

I. で引用してきた FLIGHT の英文が、検定や世間の常識の観点から日本の中学生のための教材として受け入れられないことは、既に議論してきた。実は内容面での問題以外に、もう一つの障壁がある。使用語彙の問題である。どのような語を、何語程度教えるべきかが、使用される題材を規定するのはいうまでもない。

1996年告示の中学校学習指導要領では、中学3年間で指導する語の総数を900語程度、高校の「英語Ⅰ」で中学既習語+400語程度、選択科目の「英語Ⅱ」では「英語Ⅰ」の新語数+500語程度、リーディングでは「英語Ⅰ」の新語数+900語程度と定めている。指導要領では、不規則活用動詞、助動詞の屈折形や、名詞、代名詞、形容詞等の変化形はすべて別語と見なされているので、実質10%以上の語が意味・概念の分かる語彙としてはこの数より差し引かれることになる。中学3年間で約800語、高校1年生終了時で1100語程度が学習されるに過ぎないことになる。その結果、望月等(2003年)の調査によると、レベル別多読教材の400ヘッドワードで書かれた初級読解教材でも、異なり語のカバー率は52.6%、700ヘッドワードの場合は47.8%で、「中学3年間で約900語を学習したとしても、700ヘッドワードのレベル別多読教材を読みこなすのは、かなり難しいこと」(同上、p.18)になる。これではたとえ興味深いトピックスが題材に選ばれたとしても、内容のある教材には仕立て上げられないだろう。

日本の中学校教科書に出てくる英文の量の少なさは、諸外国の教科書をざっとでも見てみれば一目瞭然、ショックを受ける事実であるが、インプット量と指導すべき語彙数の少なさが相まって、教科書の中身を薄っぺらなものにしている点は否定できない。豊かな読解活動を保証する第1歩として、指導要領の示す語数については、認知語彙(recognition vocabulary)

と発表語彙(production vocabulary)を区分し、ほとんどが内容語(content word)である認知語彙は、大幅に語彙数の制限を緩めるべきであると提言したい。

2. 発想別分類

今回日本とノルウェーの教科書を読み比べてみて、語数と共に、使用語彙の種類の違いにも驚かされた。最初漠然と感じた両者の差異は印象の範囲内のものではあったが、その違いにはっきりとした説明のヒントを与えてくれたのは、本箱の奥に眠っていた古い1冊の小辞典『英語ハンドブック』である。これは和英発想別分類動詞辞典が組み込まれたユニークな辞典で、動詞(句)の一部がプラス/マイナスイメージに分類して提示されている。この方法には客観性を欠く危険性もあると思われるが、筆者は動詞のみでなく気持ちを表現できる形容詞や名詞にも、「生理的・心理的にプラスの語感を持つもの」と「マイナスの語感を持つもの」(前掲書, p.2)が多数含まれていると考え、この観点から語彙の比較をすることで、両者の違いが明瞭になるのではと予測した。

両国の教科書から該当する語を取り出して、プラス/マイナスの発想別に分類してみたところ、ノルウェーの教科書では、①気持ちなどを伝える表現(語彙)が豊富であること②マイナスイメージの語が、プラスイメージの語に劣らず、バリエーションに富み、語彙数も多いこと、対して日本の教科書では、③特に1年生で出てくる感情表現の語彙が極端に少ないこと④プラスイメージの語に比べて、マイナスイメージの語の出現率が大変低いこと、が判明した。具体的に見てみよう。

FLIGHT 8 に出てくる感情表現の単語(動詞, 形容詞, 名詞)は総数112語、日本の中学1年の教科書全7冊に出てくるのは延べ74語、平均して1冊あたり30語前後である。これを発想別に見てみると、*FLIGHT 8* では、プラスイメージの語が46語、マイナスイメージの語が66語であるのに対し、日本の方は、7冊で延べプラスイメージ48語、マイナスイメージ26語であ

る。中学校で圧倒的なシェアを占める⁽⁵⁾3冊についてみると、マイナスの語感を持つ語は、動詞が bite/kid/miss/waste/worry の5語、形容詞が bad/difficult/sad/sorry/wrong の5語、名詞が cold/matter の2語のみである。この3冊のうち1冊には、マイナスイメージの語は sorry ただ1語しか出てこない。日本の中学1年生は、good/well, interesting, love/like, laugh は習っても ill/sick, boring, hate, cry/weep は知らないのである。3年間を通して、clean, quiet は出てくるが、dirty, noisy は出てこない。ノルウェーの1年生が習う fail, tease, nervous, allergic, stupid, crime, quarrel, victim 等の身近な単語は日本では導入されない(巻末資料参照)。ちなみに上記3冊の中学3年間を通した総語数の合計を見ると、プラスイメージの語とマイナスイメージの語との出現率はバランスのとれたものになっている(マイナスイメージの語は、NEW CROWN ENGLISH SERIES 49語, SUNSHINE ENGLISH COURSE 42語, NEW HORIZON English Course 45語)。

英語を習い始める日本の中学1年生にも、ノルウェーの生徒と同じように、社会の現実を直視し、自分の内面を素直に語れるような語彙をもっと多く習得させるべきであろう。どのような語彙を導入するかには、どのような題材を教科書に盛り込むかと同様に、教科書著作者の哲学が反映するのだと思う。

注

- (1) Berit Haugnes Bromseth & Lisbeth Wigdahl. *FLIGHT EXTRA 8. / FLIGHT TEXTBOOK 9. / FLIGHT TEXTBOOK 10.* J. W. Cappelens Forlag ASA. 1998.
- (2) 1998年、中村敬が代表著作者となっていた三省堂出版の高校英語Ⅱ教科書 *FIRST ENGLISH SERIES II* の13課〈War〉には、第2次大戦中の旧日本軍による住民虐殺が取り上げられていた。検定合格後であるにもかかわらず、自民党の圧力でこの題材が〈My Fair Lady〉に差し替えられ、社会に大きな反響を巻き起こした。
- (3) 250ヘッドワードから2500ヘッドワードまでレベル別に7段階に分かれた多読用教材 Oxford Bookworms Library。400語は下から2番目、700語は

3 番目のレベルである。

(4) そのため、筆者の分類の判断については複数のインフォーマントにチェックを依頼した。

(5) *NEW CROWN ENGLISH SERIES/SUNSHINE ENGLISH COURSE/NEW HORIZON English Course* の3種類で、85% のシェアを占めている。

〈資料1〉 FLIGHT 8 感情表現の語彙(動詞・形容詞・名詞)の発想別分類

プラスイメージの語	マイナスイメージの語	プラスイメージの語	マイナスイメージの語
〈L1〉 alright OK friend smile laugh fun fine welcome try love good (better / best) like well save clever gifted wonderful	hate nervous poor alone miss lonely tease break measles trouble	〈L3〉 real help famous	noise junk trick lost pickpocket boring
		〈L4〉 enjoy important favorite sweet thank perfect happy hope	hungry
		〈L5〉 strong interested admire kind clean	evil scare scary sorry wrong itch itchy twitch
〈L2〉 nice cool lucky holy popular smart	angry allergic problem scream stupid kill devil witch bad unlucky	〈L6〉 inventor invent rich pretty (prettier) please	mistake dreadful struck fell afraid

〈L7〉	crime thief hooligan ruin chaos fight hurt shoplifter shoplift quarrel robber robbery difficult		ripper prostitute murder victim killer stole (stolen)
		〈L8〉 beautiful true	monster fail starve death died sad false

〈資料2〉 日本の中学1年生教科書7冊感情表現の語彙(動詞・形容詞・名詞)の発想別分類

プラスイメージの語	マイナスイメージの語	プラスイメージの語	マイナスイメージの語
beautiful careful sheer cute dear delicious easy enjoy (enjoyed) famous favorite fine free friend friendly fun good (better/ best) great happy hard help hooray interest interesting joy	attack bad bite cold dead death die difficult drop fall hungry kid matter miss mistake oversleep (overslept) sad sorry stranger thirsty trash trick waste witch	kind laugh like little love luck nice OK peaceful popular pretty protect respect rich right service shine smile strong thank thanks warm welcome well	worry wrong

資料とした中学校教科書

- 笠島準一・浅野博他 *NEW HORIZON English Course* ①～③, 東京書籍, 2002年
- 佐々木輝雄・樋口忠彦・田中正道他 *ONE WORLD English Course New Edition* ①～③, 教育出版, 2002年
- 島岡丘・青木昭六(監)松畑熙一他 *SUNSHINE ENGLISH COURSE* ①～③, 開隆堂, 2002年
- 東後勝明他 *COLUMBUS 21* ①～③, 光村図書出版, 2002年
- 堀口俊一他 *TOTAL ENGLISH New Edition* ①～③, 学校図書, 2002年
- 森住衛(監)齊藤栄二他 *NEW CROWN ENGLISH SERIES* ①～③, 三省堂, 2002年
- 渡部昇一他 *TOTAL active. comm.* ①～③, 秀文館, 2002年

参考文献

- 国弘正雄(編著)『英語ハンドブック』パナジアン, 1973年
- 瀬田幸人 「語彙の選択と傾向」『英語教育』2001年10月号, pp.21-23.
- 田中正道 「教科書教材の変遷と現在の教材の特徴」『英語教育』1992年6月号, pp.11-13.
- 中村敬・峰村勝 『幻の英語教材—英語教科書, その政治性と題材論』三元社, 2004年
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店, 2003年
- 山田雄一郎 「中学校英語教科書の分析と批判」『広島修大論集』第45巻第1号, 広島修道大学人文学会, 2004年, pp.149-203.